第84回麻布獣医学会　一般演題3

ミニブタの胃内異物の一例

小野田麻衣，坂和　由紀，相田　紀明，小中　一成，
内山　史一，加藤　真紀，山田　　裕，磯　日出夫

磯動物病院：栃木県

［はじめに］

近年，エキゾチックペットに加えて，ペットとしてミニブタを飼養する飼い主が増えている。よって，これらの動物における一般診療に加えて，去勢手術，避妊手術，切歯術などを行う機会が少なくない。

しかし，動物病院によっては犬猫のみを診療の対象としているところが圧倒的に多い。よって，犬猫以外の動物を飼養している飼い主にとっては，診療してくれる動物病院を探すことに苦慮しているのが現況である。そこで今回，家畜としてブタを日常診療の対象としている当院で，食欲不振と歩様異常を主訴としたミニブタの診療する機会を得た。そして，胃内異物と診断し胃切開術を施して良好な結果が得られたので，その概要を報告する。

［材料および方法］

症例は室内飼いされているミニブタ（Potbellied Pig），雄去勢済み，6ヶ月齢，体重6.0 kg根菜類を主食で飼養され，既往症は生後2ヶ月で下痢を主徴としたコクシジウム症であり，ジメトキシンの3日間の処方にて治癒した。患畜は7日前より食欲不振と歩様を嫌い，少量の黒色硬便を排泄との稟告で来院した。外貌検査では腹部の軽度膨満が認められ，X線検査で胃腸内の多量の食塊が認められたので食滞と診断し，内科療法としてメトクロプラミド5日間の処方し経過観察したが，10日後再来院し，食欲廃絶，起立困難，体重減少，腹部膨満，腹部圧痛が認められた。X線検査で胃の拡張と腸内に多量のガス貯留を確認した。血液一般検査ではWBC 13,500 μlと高値であり，血液生化学検査ではTP 4.3g/dl，AlB 2.1 g/dlと低値を示した。以上の症状と検査結果により消化管内異物を疑い処置した。

［結果］

はじめに麻酔導入のための鎮静として，ドミトール80 μg/kg，ブトファノール0.2 μmg/kg，塩酸ケタミン10 mg/kgを頚部に筋肉注射後，2～4％イソフルランにて吸入麻酔を維持した。患畜は仰臥位にて，陰茎部を避けた位置で腹部正中切開を行った。次に膨満した胃を切開して，食塊と数本のゴムヒモ状の異物を摘出し，ついで腸管内の検査を行い，異物のないことを確認して閉腹した。翌日退院したが，約1ヶ月間に軽度な便秘様症状を数回繰り返したが，それ以降は良好であった。

［考察］

今回，一般の小動物病院では診療する機会が稀なミニブタの腹部の胃切開手術を行ったが，血液検査のための採血部位の選択と方法，不動化のための鎮静薬の選択および投与部位などに特殊性があった。

また，腸管の形状は円錐状結腸なので，下部消化管検査には大きな切開創を必要とするので，犬猫と違いブタの診療に対する特別な知識が必要と思われた。

さらにミニブタを室内飼いする場合は，好奇心旺盛な習性から異物を摂取することが多いので，飼養環境にも注意が必要と思われた。予防においても家畜用として多くのワクチンがあり，使用については法的な規約があるので遵守しなければならない。一方，飼い主に対して獣医師が適切な飼養管理の指導ができることも重要である。したがって，一般の動物病院では敬遠しがちなエキゾチックアニマルについての専門的な知識を具備し，飼い主の要求に応えることは，診療対象動物種の広がりに繋がる。

これらのことは動物病院の社会的使命であり，病院経営上も重要であると考えられた。